

眞晝

窓の中では事務がつづけられてゐた
心の中に夕立雲のはげしさを夢みながら
とぼとぼと歩いてゐると
建物風に身もだえしてゐる一株の夾竹桃が
僕目の中でゆれた
葉には埃をいつばいためて
造花のやうな花を誇つてゐた
僕は自分のくつきりした短い影をかかへながら
その側に寄つた
ためいきをお互につきあつた
夾竹桃はささやいた
》あなたたちに心があるとは信じられない
僕はふたたび歩きはじめた
窓の中では事務がつづけられてゐた